

IMAGE PROCESSING UNIT AND IMAGE PROCESSING METHOD

Publication number: JP11027545

Publication date: 1999-01-29

Inventor: TAKAOKA MAKOTO; NISHIKATA AKINOBU

Applicant: CANON KK

Classification:

- international:

G06K9/20; G06F17/21; G06K9/62; G06T7/00;
G06T7/60; H04N1/387; H04N1/46; H04N1/60;
G06K9/20; G06F17/21; G06K9/62; G06T7/00;
G06T7/60; H04N1/387; H04N1/46; H04N1/60; (IPC1-7):
H04N1/60; G06F17/21; G06K9/20; G06K9/62;
G06T7/60; H04N1/387; H04N1/46

- European: G06T7/00P

Application number: JP19970178629 19970703

Priority number(s): JP19970178629 19970703

Also published as:



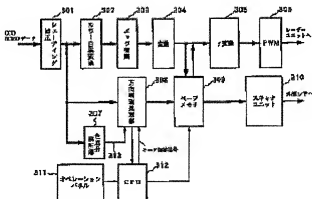
US6295385 (B1)

Report a data error here

Abstract of JP11027545

PROBLEM TO BE SOLVED: To allow highly accurate discrimination of the direction of an original by obtaining a frequency of appearance for each color component from input color image data, extracting a character area by each color image based on the frequency of appearance for each color component and discriminating the direction based on character area information.

SOLUTION: A color component analysis section 307 binarizes RGB multivalued image data at a specified level based on color image data of a received original document, adds data for each of R, G, B, C, M, Y colors, a frequency of appearance for each color component is obtained for each image area, and the result is sent to a direction discrimination processing section 308. The direction discrimination processing section 308 receives image data sequentially and stores character image data, while extracting a character area. Based on an analysis result 313 by the color component analysis section 307, color information as a background color is not used if it has a wide range even if has high priority, and the direction discrimination is processed from the character area of the color signal with a next high priority. A CPU 312 conducts prescribed edition to image data based on the discrimination result of the processing section 308 to output the edited image data.



Data supplied from the esp@cenet database - Worldwide

特開平11-27545

(43) 公開日 平成11年(1999) 1月29日

(51) Int.Cl. ⁸	識別記号	F I
H 0 4 N 1/60		H 0 4 N 1/40 D
G 0 6 F 17/21		G 0 6 K 9/20 3 6 0 C
G 0 6 T 7/60		9/62 6 3 0 C
G 0 6 K 9/20	3 6 0	H 0 4 N 1/387
9/62	6 3 0	G 0 6 F 15/20 5 3 0 A

審査請求 未請求 請求項の数13 O L (全 13 頁) 最終頁に続く

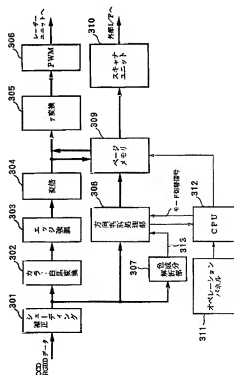
(21) 出願番号	特願平9-178629	(71) 出願人	000001007 キヤノン株式会社 東京都大田区下丸子3丁目30番2号
(22) 出願日	平成9年(1997) 7月3日	(72) 発明者	高岡 真琴 東京都大田区下丸子3丁目30番2号 キヤ ノン株式会社内
		(73) 発明者	西方 彰信 東京都大田区下丸子3丁目30番2号 キヤ ノン株式会社内
		(74) 代理人	弁理士 大塚 康徳 (外2名)

(54) 【発明の名称】 画像処理装置及び画像処理方法

(57) 【要約】

【課題】 カラー画像に対して、精度の高い方向判別処理を行なう画像処理装置及び画像処理方法を提供する。

【解決手段】 入力された文書原稿のカラー画像データから色成分解析部307で各色成分の出現頻度を求め、方向判別処理部308で各色成分の出現頻度から文字認識処理により文書原稿の方向を判別し、その判別結果に応じて画像データに所定の編集を行ない、編集された画像データを出力する。



【特許請求の範囲】

【請求項1】 文書原稿をカラー画像データとして読み取って入力する画像入力手段と、

前記画像入力手段より入力されたカラー画像データに基づいて前記文書原稿の方向を判別する方向判別手段と、前記方向判別手段での判別結果に応じて前記カラー画像データに応じたデータに対して所定の編集を行なう画像編集手段と、

前記画像編集手段により編集された画像データを出力する出力手段とを有することを特徴とする画像処理装置。

【請求項2】 前記方向判別手段は、前記カラー画像データに基づいて各色成分の出現頻度を解析する色成分解析手段と、前記色成分解析手段での解析結果に従って前記カラー画像データの文字認識を行なう文字認識手段とを含むことを特徴とする請求項1記載の画像処理装置。

【請求項3】 前記方向判別手段は、前記カラー画像データの各色成分毎に出現頻度の高い順に文字認識を行ない、それぞれの認識結果から前記文書原稿の方向を判別することを特徴とする請求項2記載の画像処理装置。

【請求項4】 前記方向判別手段は、前記カラー画像データの色成分が少ない場合、最多出現頻度の色成分の画像データに対して文字認識を行ない、前記文書原稿の方向を判別することを特徴とする請求項2記載の画像処理装置。

【請求項5】 前記方向判別手段は、文書原稿の下地色成分を除いたカラー画像データに対して文字認識を行ない、前記文書原稿の方向を判別することを特徴とする請求項2記載の画像処理装置。

【請求項6】 前記画像編集手段は、複数の文書原稿の縮小レイアウト処理であることを特徴とする請求項1記載の画像処理装置。

【請求項7】 文書原稿をカラー画像データとして読み取って入力する画像入力工程と、

前記画像入力工程より入力されたカラー画像データに基づいて前記文書原稿の方向を判別する方向判別工程と、前記方向判別工程での判別結果に応じて前記カラー画像データに応じたデータに対して所定の編集を行なう画像編集工程と、

前記画像編集工程で編集された画像データを出力する出力工程とを有することを特徴とする画像処理方法。

【請求項8】 前記方向判別工程は、前記カラー画像データに基づいて各色成分の出現頻度を解析する色成分解析工程と、前記色成分解析工程での解析結果に従って前記カラー画像データの文字認識を行なう文字認識工程とを含むことを特徴とする請求項7記載の画像処理方法。

【請求項9】 前記方向判別工程は、前記カラー画像データの各色成分毎に出現頻度の高い順に文字認識を行ない、それぞれの認識結果から前記文書原稿の方向を判別することを特徴とする請求項2記載の画像処理方法。

【請求項10】 前記方向判別工程は、前記カラー画像

データの色成分が少ない場合、最多出現頻度の色成分の画像データに対して文字認識を行ない、前記文書原稿の方向を判別することを特徴とする請求項8記載の画像処理方法。

【請求項11】 前記方向判別工程は、文書原稿の下地色成分を除いたカラー画像データに対して文字認識を行ない、前記文書原稿の方向を判別することを特徴とする請求項8記載の画像処理方法。

【請求項12】 前記画像編集工程は、複数の文書原稿の縮小レイアウト処理であることを特徴とする請求項7記載の画像処理方法。

【請求項13】 画像処理のプログラムコードが格納されたコンピュータ可読媒体であって、文書原稿をカラー画像データとして読み取って入力する画像入力工程のコードと、

入力されたカラー画像データに基づいて前記文書原稿の方向を判別する方向判別工程のコードと、判別結果に応じて前記カラー画像データに応じたデータに対して所定の編集を行なう画像編集工程のコードとを有することを特徴とするコンピュータ可読媒体。

【発明の詳細な説明】

【0001】

【発明の属する技術分野】本発明は、例えばファクシミリ(FAX)機能、ファイレイン機能等を有するデジタル複写機や複写機やスキャナ機器等の画像処理装置及び画像処理方法に関するものである。

【0002】

【従来の技術】近年、複写機もデジタル化が進み、かなりの複写機がコピー機能に限らず複合動作が可能となってきた。特に、コピー、プリンタ、FAX、更にファイレイン、といった複合動作を行なうようになってきており、例えばファイレインされたデータを読み出してプリントしたり、FAXで送られてきた画像をファイレインしたりする複合動作が可能である。

【0003】このように高度化してきたデジタル複写機は、利用者が気軽にコピー感覚で、オートフィードに原稿を載せてFAXしたり、ファイレインしたりできるため、よく使用されるようになってきた。

【0004】また、デジタル複写機の動作速度も年々向上し、1分間に20枚〜80枚位の入出力速度を出せるようになってきている。そのため、利用者は、沢山の原稿をコピー、ファイレイン、或いはFAXを行ないたい場合、動作速度の違い従来の専用機を使わず、この種のデジタル複写機を使用することが多くなってきた。つまり、利用者は、大量の原稿を処理するため、機械の前に張り着いて、原稿がすべて読み込まれるまで待っていたり、時間をかけて再び原稿を取りに行くのがとても煩わしく感じられ、高速のデジタル複写機を使用するのである。

【0005】しかしながら、従来のように大量の原稿を処理するため、複写機のところに持っている際に、原稿の向きが揃っていない場合、前もって原稿の向きを揃えるように人間が整理してから、動作に望んでいた。

【0006】上述のデジタル複写機で複数枚の原稿をコピーしたり、FAXしたりする際に、原稿の向きを整理する作業は煩わしい作業である。特に、A4サイズの原稿の場合、縦方向の原稿の場合は簡単だが、横向き(A4R)の原稿が混在している場合、左右どちらに向かせるか悩むところである。通常、複写機は、フィーダに載せるのにA4原稿の場合、縦方向に載せるが、場合によってはA4Rの方向に紙を載せたりする場合もある。また、A4R(横向き)の原稿の場合、正方向の原稿の向きをフィーダの口に合わせたり、逆方向の向きを合わせたりする場合がある。さらに原稿の片側にバインダのための穴が開けてあると、オートフィーダに原稿を乗せる際に、ひっくり返して乗せる場合がある。

【0007】図1は、A4サイズの通常の文書原稿をオートフィーダー101にセットする際の方向102～109を示す図である。図示するように、実に多種類のセット方法がある。

【0008】このように原稿のセットの仕方もまちまちであるため、利用者によって原稿の向きの整理の仕方もまちまちであった。

【0009】このため、原稿が整理されていないければ、そのままあちこち向いたコピー用紙が排出されていた。このような場合、コピー枚数が少なれば良いが、大量で、しかもオートステイブル機器を用いると、そのまま固定されてしまう。また、最近よく利用されるようになってきた縮小レイアウト機能も原稿を載せたままの状態ですべての原稿が1枚にレイアウトされてコピーされてしまう。

【0010】そこで、利用者が原稿の向きを整理することなく、さらには、人による原稿の向きセットの相違による違いを解決するために、原稿向き判別技術が開発されてきた。この原稿向き検知技術をデジタル複写機に搭載することにより、利用者は原稿を整理するといった煩わしさから解放されることになる。

【0011】代表的な方向判別技術は、文字認識の技術を利用する方法、レイアウト認識の技術を利用する方法等がある。これらの技術は、原稿中に書かれた内容の一部を瞬時に判断し、その結果を出力する高速処理を行っている。例えば、文字認識技術の応用で方向を判別する方法は、原稿中の文字領域を抽出し、その文字領域の文字を認識して正しい方向を判別する方法である。

【0012】

【発明が解決しようとする課題】しかしながら、原稿向き判別技術は文書原稿中の、文書の特徴を認識し、その原稿の向きを認識する技術であるが、その性能は完璧ではない。時には、判断を誤ることもある。特に、近年は

カラー文書が多く作成されるような時代となり、原稿向き判別もカラー原稿に対しても正しく判別しなければならなくなった。

【0013】従来は、白黒原稿を対象としていたため、画像を入力する時は白黒2値画像を用いて方向判別を行ってきた。

【0014】これに対し、デジタル複合複写機の場合、スキャナとしての機能も重要なため、例え白黒コピー機であったとしても、カラーCCDを搭載し、入力にはカラーで行なうことが可能なものも多い。

【0015】しかしながら、方向判別機能は、白黒原稿処理のため、せっかく色情報があるのに、その情報を捨ててしまっていた訳である。このため、以下のような原稿に対して、方向判別処理がうまく作動しないという課題があった。

【0016】(1)最近よく用いられる2色刷り、3色刷りの原稿を画像入力すると、色により、肝心の文字部がぼれたりして、正しく方向判別ができなかった。

【0017】(2)最も重要な方向性を表す色文字部が、方向判別処理の対象部からはずれる場合があった。

【0018】(3)背景がある色で塗りつぶされ、その中に、他の色を用いた文字部があるような原稿で、うまく方向判別処理が作動しなかった。

【0019】本発明は、上記課題を解決するためになされたもので、カラー画像に対して、精度の高い方向判別処理を行なう画像処理装置及び画像処理方法を提供することを目的とする。

【0020】

【課題を解決するための手段】上記目的を達成するために、本発明の画像処理装置は、文書原稿をカラー画像データとして読み取って入力する画像入力手段と、前記画像入力手段より入力されたカラー画像データに基づいて前記文書原稿の方向を判別する方向判別手段と、前記方向判別手段での判別結果に応じて前記カラー画像データに応じたデータに対して所定の編集を行なう画像編集手段と、前記画像編集手段により編集された画像データを出力する出力手段とを有することを特徴とする。

【0021】また、上記目的を達成するために、本発明の画像処理方法は、文書原稿をカラー画像データとして読み取って入力する画像入力工程と、前記画像入力工程より入力されたカラー画像データに基づいて前記文書原稿の方向を判別する方向判別工程と、前記方向判別工程での判別結果に応じて前記カラー画像データに応じたデータに対して所定の編集を行なう画像編集工程と、前記画像編集工程で編集された画像データを出力する出力工程とを有することを特徴とする。

【0022】

【発明の実施の形態】以下、図面を参照しながら本発明に係る実施の形態を詳細に説明する。

【0023】尚、本実施形態では、本発明の適用例とし

てデジタル複合複写機を例に説明するが、これに限るものではなく、他の種々の装置に適用できることは言うまでもない。

【0024】図2は、本実施形態におけるデジタル複合複写機の外観を示す図である。同図において、201はイメージスキャナ部であり、原稿を読み取り、デジタル信号処理を行なうところである。尚、このスキャナ部201には、オートフィーダーと呼ばれる自動紙送り装置も含まれている。また、スキャナ部201のセンサとして色情報を読み込むことが可能なカラーセンサが装備されている。

【0025】一方、202はプリンタ部であり、イメージスキャナ部201で読み取られた原稿画像に対応した画像を用紙にプリントする部分である。また、203は電話線であり、外部装置とのファクシミリ送受信等に行われる。

【0026】図3は、本実施形態における画像処理系の構成を示すブロック図である。同図において、301はシェーディング補正部であり、不図示のRGBカラーCCDで読み取られた電気信号における画素間のばらつきを補正する。302はカラー白黒変換部であり、RGB色画像データを白黒グレースケール画像へ変換する。この変換方法として、厳密にはRGB輝度データより明度データへ変換する方法があるが、G(グリーン)データを用いてもさほど問題はない。303はエッジ強調回路であり、文字や表等のエッジを強調する処理を行なう。例えば、5×5のウィンドウで2次微分を行ない、画像のエッジを強調する。

【0027】304は変倍回路であり、縮小コピー時はデータの間引き処理を行ない、拡大コピー時はデータの補間を行なう。また、両面や縮小レイアウトをする時は後述するページメモリに蓄えられ、操作パネルからの指示に従ったコピーになるようにメモリから読み出すアドレスを切り替えながら、画像データが読み出される。305はγ変換回路であり、輝度データである画像データをプリンタに出力するための濃度データに変換する。尚、このデータ変換は、テーブルサーチ等により行なわれる。306はPWM回路であり、濃度データに変換された画像データをレーザの発光強度の信号に変換し、画像データの濃度に従ったパルス幅を不図示のレーザユニットに対して出力する。

【0028】312はCPU部であり、本処理系をコントロールする心臓部である。また、CPU部312には本装置のプログラムや制御データを格納するROM、CPUが処理を実行時に使用するワークエリアや各種テーブル等が定義されたRAM、及び周辺回路等が含まれる。311は利用者の指示を受け付けるオペレーションパネル部であり、あらゆる指示がここで行なわれる。ここで受け取った指示又は命令はCPU部312に送られる。307は本実施形態における色成分解析部であり、

RGBカラーデータの各画素成分がどの程度存在するか解析する。

【0029】308は方向判別処理部であり、色成分解析部307から入力された解析結果313を考慮し、シェーディング補正部301でシェーディング補正された画像データを解析し、その文書の方向を判別する。具体的には、色成分解析部307で解析された結果313を用いて、その色を優先的に用いるか背景色を検知してその色成分の情報に用いないなどの判断を行なう。

【0030】309はページメモリであり、入力された画像データをページ毎に蓄積する。尚、本処理系では、画像データがリアルタイムで入力されており、方向判別処理部308では文書画像1ページの画像データを入力しながら、即座に方向判別結果をCPU部312に通知し、その結果によりCPU部312がページメモリ309の読み出し順序を制御する。また、コピー動作時は、画像データがページメモリ309より読み出され、γ変換回路305へ送られる。310はスキャユニットであり、スキャ動作時に読み取った画像データを外部へ送出する。

【0031】以上の構成において、オペレーションパネル部311から方向判別処理と縮小レイアウト送信が選択されると、CPU部312は方向判別処理部308に判別処理実行をセットする。ここで、画像データの流れは、RGBのCCDより電気信号を受け、シェーディング補正部301で補正される。そして、RGBカラーデータは、出力先が白黒プリンタの場合、カラー白黒変換部302で白黒データに変換される。これは、白黒プリンタでプリントする場合、カラーデータを必要としないためである。ちなみに、カラースキャナ入力が指示されていた場合は、この系は素通りする。そして、エッジ強調部303で、エッジ強調(選択指示された場合のみ)され、変倍処理部304に受け渡される。

【0032】また、上述の処理と同時に、シェーディング処理された画像データは色成分解析部307にも送られ、色成分解析部307が画像データを入力しながら色成分解析を行なう。この色成分解析部307は、RGB多値画像データのある特定のスライスレベルで二値化し、その2値データを各色毎に加算していく。つまり、R、G、B、C、M、Y別々に加算していく、全画像領域についてカウントすると、その結果を方向判別処理部308に送る。この色成分解析部307の詳細は更に後述する。

【0033】次に、方向判別処理部308は、逐次画像データを入力し、文字領域の抽出を行ないながら文字領域画像データを蓄積していく。その後、文字領域抽出が終了すると、色成分解析部307の解析結果313に基づいて優先順位の高い色画像の文字領域から方向判別処理を行なう。そして、その判別結果をCPU部312に送出する。

【0034】一方、変換回路304で間引かれた画像データは、ページメモリ309に一時格納される。尚、ページメモリ309の容量によるが、画像データは多数枚ここに一時的に格納される。次に、方向判別処理結果に基づいて、正規な方向でない画像を回転処理（読み出し方を工夫することで対処できる）し、1ページ分蓄積する。そして、画像データは、複写機動作では、γ変換回路305でプリンタの特性に変換され、PWM部306を介してレーザープリントが行なわれる。

【0035】図4は、本実施形態におけるオペレーションパネル部311の構成を示す外観図である。同図において、401は拡張機能キーであり、コピーを行なう際に、縮小レイアウトを行なうかどうか、自動原稿方向検知のオン/オフ、カラー原稿の選択等のモード選択機能を有する。そして、利用者は、コピーを行なう際に、拡張機能キー401により縮小レイアウトを行なうかどうかを選択する。

【0036】ここで、コピー時の縮小レイアウトについて説明する。図5は、複数枚の原稿を縮小レイアウトした状態を示す図である。図5に示す(a)、(c)、(e)、(g)は片面縮小レイアウトを、また(b)、(d)、(f)、(h)は両面縮小レイアウトを示すものである。この両面機能は、紙が節約になり、配布資料などはかさばらなくて済むため、よく用いられるようになった機能である。

【0037】しかしながら、このような縮小レイアウトは文書の中身がどんなものであれ、機械的に縮小レイアウトされてしまう。図6は、4in1の両面縮小レイアウトの例を示す図である。図示するように、文書には、日本語の場合縦書き、横書きがあり、紙面は縦置き、横置きの配置がある。つまり、上向き横書き文書601～604の場合は605、606のように、上向き縦書き文書607～610の場合は611、612のように、左向き縦書き文書613～616の場合は617、618のように、そして、左向き横書き文書619～622の場合は623、624のようにそれぞれ縮小レイアウトされる。

【0038】図6からも明らかなように、実際縮小レイアウトされたコピーは利用者が見て最適なレイアウトと言えるものではなかった。

【0039】図7は、本実施形態における縮小レイアウトの結果を示す図である。図示するように、原稿の向きによってその配置が最適にレイアウトされている。つまり、上向き横書き文書701～704の場合は705、706のように、上向き縦書き文書707～710の場合は711、712のように、左向き縦書き文書713～716の場合は717、718のように、そして、左向き横書き文書719～722の場合は723、724のようにそれぞれ縮小レイアウトされる。

【0040】このような縮小レイアウトの最適原稿配置

を実現するために、原稿方向検知を行ない、その原稿の向きから最適な縮小レイアウトが可能となる。

【0041】次に、上述の縮小レイアウトを行なう動作について説明する。図8は、本実施形態における縮小レイアウト処理を示すフローチャートである。

【0042】まず、ステップS801において、図4に外観を示すオペレーションパネル部311の動作モード（コピー/ファクス/ファイル）選択キー402からコピー動作が選択され、ステップS802で拡張機能キー401により縮小レイアウトが選択される。具体的には、拡張機能キー401が押下されると、表示モードが図5に示したそれぞれの縮小レイアウト画面表示に変更され、その表示画面から所望のレイアウト方法が選択される。

【0043】次に、ステップS803において、初期設定機能により方向判別機能の設定を行なう。その際、色成分解析を行なうかどうかも選択される。そして、ステップS804で方向判別機能を選択するキーが選択される。尚、この“原稿方向検知ON&色成分解析ON&コピー”にて色成分解析方向判別モードが選択される。その後、ステップS805において、コピースタートキーが押され、ステップS805でコピー動作をスタートする。次に、ステップS806において、原稿を給紙し、原稿台の上に原稿が配置される。そして、複写機の読み取り機構が移動して画像読み取りを開始する。

【0044】次に、ステップS809において、読み取られた画像データは上述の画像処理が施され、ページメモリ309に一時保存される一方、ステップS807では、色成分解析部307によって画像のカラー画像解析が行なわれる。また同時に、ステップS808では、色別の文字領域抽出が行なわれる。そして、ステップS810において、1ページ分の解析結果が方向判別処理部308に送られ、方向判別処理が行なわれる。

【0045】そして、ステップS811において、方向判別処理結果をページ毎に一時記憶し、続くステップS812で縮小レイアウトを指示された枚数、例えば4in1は4枚のように給紙したかどうか確認する。ここで、画像データが揃ったならばステップS813に進み、正方向縮小レイアウト順に画像を読み出し、プリントを行なう。そして、ステップS814で排紙し、ステップS815では全て終了かどうか判断し、終了するまで上述の動作を繰り返す。

【0046】このように、本実施形態では、デジタル複写機やスキャナ機器で方向判別手段のために画像を入力する際に、従来、画像データとして白黒画像を入力していたものを、RGB各色成分画像で入力し、RGB別に入力された画像データより、以下の処理を行なう。

(1) あるしきい値で各色別に2値化する。各色毎に画素データを加算する。

【0047】例えば、RED, BLUE, GREEN,

CYAN, MAGENTA, YELLOWの色別に色画素数を求める。その画素数、色数の多い順、色ごとの頻度数を方向判別処理部へ渡す。

(2) 方向判別処理の前処理である文字領域抽出手段は、各色画素別に文字領域抽出を行なう。

(3) 方向判別処理部は、前記色成分解析結果、色別の文字領域情報に基づいて方向判別処理を行なう。その際、色成分解析結果は、サンプリングする文字領域の優先順位を決定する情報になる。色成分情報は、最も多く使われている色画像を優先順位を上げたり、逆に下地で用いられている色画像は、とびぬけて画素数が多いため、その色は省いたりする判断が可能である。

【0048】従って、本実施形態によれば、色情報を用いて原稿方向判別を行なうことで、カラー原稿に対する精度の高い方向判別処理を実現するようにする。

【0049】次に、上述の各処理部について詳細に説明する。従来、文書方向判別の手法にはいくつかの手法があるが、本実施形態では文書の方向を決定する大きな要素として文字の方向が最も重要であろうと考え、文字の方向を判別し、文書の方向を判別する方法について説明する。

【0050】通常、活字文書は、ワープロ作成文書の他に、図、表、絵などが混在している場合が多い。その場合、文字部のみを領域判別し、文字認識手法の一部を用いて方向を判別する。

【0051】【色成分解析処理】図9は、色成分解析部307の処理を説明するための図である。色成分解析部307では、RGBカラーセンサより入力された多値画像データを所定のしきい値で2値化する。例えば、REDセンサの画像データの値が「130」であれば、しきい値50で2値化すると、「1」となる。そして、REDセンサで「1」となった画像の値をライン毎とページ全体で加算する。つまり、よりREDの色が多く出現するとより加算結果が多くなる。この処理をGREEN、BLUEのセンサでも行なう。

【0052】図9に示す(B)は、各色毎のヒストグラムの例を示す図である。図中に示す記号「▲」はしきい値である。図から分かるように、しきい値より大きな画素値が多いと色成分が大きいと判断する。また、CYANの色成分を抽出する方法として、GREENセンサの画像データとBLUEセンサの画像データとの平均をとり、CYANの画像データとする。同様に、MAGENTA、YELLOWの画像データも作成する。図9に示す(C)はRGBからCMYを求める式を示す図である。

【0053】この処理により、RED、GREEN、BLUE、CYAN、MAGENTA、YELLOWの各色成分のライン毎とページ全体の加算結果が得られる。図9に示す(D)は、各色毎の画素数の一例を示す図である。この例では、1ページの中で、GREENが一番

多く、続いてYELLOWとなる。この数値が重要な判断材料となる。つまり、以下のような判断が可能である。

【0054】(1) 最も多い文字部を利用して文書の方向を判別する。この場合、色の多い順に優先順位をつける。

【0055】(2) 背景色は抜かす。この場合、極端に色画素数が多く、2番目以降と差が激しいものを背景色と見なす。

【0056】そして、この処理結果が次の続く方向判別処理部308で、色成分解析結果として用いられる。

【0057】尚、色成分処理部307は、各色毎に並行して処理を行なうことで、画像処理系のパイプライン処理には追従できる。また、所定のしきい値は、各色毎に設定可能である。このパラメータを可変することにより、2値化のしきい値が変更できる。これにより、センサのばらつき等の補正や意識的にある色成分を強調させた結果も得ることが可能である。

【0058】【文字方向判別前処理】以下は、色別に同時に行なう処理である。

<2値化処理>本処理系は、次に続く方向判別の前処理である。ここでは、画像データは多値データを用いる。この2値化処理は、画像から文字部を抽出する目的で行なう。そのため、単純2値化の方法で良い。簡単な方法は、中間の値である「128」をスライズレベルとする方法である。

【0059】しかしながら、原稿に下地があったり、比較的薄い濃度の原稿の場合、2値化後の画像がその後の処理に適さない場合がある。このような場合、ダイナミックスライズレベルを用いた2値化処理方法がある。

【0060】この処理は、注目画素の前列の輝度、或いは濃度データの平均と注目画素の輝度、或いは濃度の値よりスライズレベルを決定し、単純2値化する。

【0061】また、多値画像データを受け取るのではなく、2値化データを受け取る方法もあるが、後に続く本処理に都合の良いデータが得られればよい。

<文字領域抽出処理>方向判別処理は、画像データより、文字領域の検出を行なう。これは、本実施形態のアルゴリズムでは、文字を方向判別の手段に用いるためである。

【0062】まず、画像データより黒画素を検出して行き、ある一定の条件を満たす領域を検出すると、その部分は文字領域と判別し、その領域情報を保存する。

【0063】ある一定の条件とは、以下の条件である。

【0064】(1) 黒画素の連続したエッジがある。

【0065】(2) ある一定の黒画素幅がある。

【0066】(3) 近辺に同様な黒画素ブロックが存在する。

【0067】以上の条件を満たした領域を文字領域と判断する。もちろん、これだけの条件では正確な判別がで

きないが、詳細はここでは割愛する。

【0068】図10は、原画像と文字領域判別結果を示す図である。図10に示す(a)は原画像であり、画像中には文字の部分、絵の部分などが書かれている。図10に示す(b)は、原画像の中から抽出した文字領域を示している。つまり、図中の1001~1005が原画像から判別された文字領域である。

【0069】文字領域の中で、1002は比較的大きな文字のブロックであり、1003は文字数の多い一番広い領域に渡る文字領域である。そして、1005は縦書きの文字領域である。

＜文字認識処理＞次に、抽出された文字領域に対して文字認識処理を行なう。この文字認識処理の方法としては、特徴ベクトル抽出、比較方式等がある。例えば、図11に示す(a)のように、「売」という文字を含む文字領域が判別された場合、第一段階として、この文字領域について文字切り出し処理を行なう。これは、一つの文字の矩形を切り出す処理で、連続する黒画素の状態を検出することで求められる。次に、第二段階として、図11に示す(b)のように、一文字を $m \times n$ (例えば 64×64)の画素ブロックに切り出す。そして、図11に示す(c)のように、その中から 2×2 画素のウィンドウを用いて黒画素の分布方向(方向ベクトル情報)を抽出する。

【0070】尚、図11に示す(c)は、方向ベクトル情報の一部を例示したものであり、上述の 2×2 画素のウィンドウをずらしてゆき、方向ベクトル情報を数十個得ることで文字の特徴とする。この特徴ベクトルと予め記憶されている文字認識辞書の内容とを比較して、特徴ベクトルが一番近い文字から順番に文字を抽出する。この場合、特徴ベクトルが特徴に近い順番に第1候補、第2候補、第3候補、…となる。この特徴ベクトルに対する特徴の近さが、専門用語では、その文字に対する距離の近さ、即ち文字認識の類似度(マッチ度)という数値となる。

【0071】[方向判別処理]このようにして文字認識の類似度が求められるが、その類似度に基づいた文字方向判別処理について説明する。図12は、文字方向判別処理を説明するための図であり、この例では「ビールの売り上げ」という文例を用いている。

【0072】図12に示す(a)は正方向の文字列であり、図12に示す(b)は 270° 回転した文字列である。ここで、文字「売」に注目すると、文字方向を判別する場合、図12に示す(c)のように、1つの文字「売」について 0° 、 90° 、 180° 、 270° の4方向から文字認識を行なってみる。ここで、各回転角度は各文字の特徴ベクトルの読み出し方を変更すればよく、特に原稿を回転させる必要はない。

【0073】各回転角度における文字認識結果は、図12に示す(c)のように、互いに異なっている。尚、図

12に示す(c)には、説明用の仮の文字認識結果と類似度が示されているが、現実にこの通りになるとは限らない。

【0074】図12に示す(c)において、正方向(0°)から文字認識を行った場合は、「売」と正しく認識され、類似度も 0.90 と高い値となる。また、 90° 回転した方向から文字認識を行った場合は、「販」と誤認識され、類似度も 0.40 と低下する。このように誤認識が発生し、類似度も低下するのは、回転した方向から見た場合の特徴ベクトルに基づいて文字認識を行ったからである。同様に、 180° 、 270° 回転した方向から文字認識を行った場合も、誤認識が発生し、類似度も低下する。このように、文字認識の方向別の類似度は、複雑な文字であればある程、その差が顕著に現れてくる。

【0075】図12に示す(c)の結果は、正方向の場合に類似度が1番高いため、文書は正方向に置いている可能性が高いと判断される。しかし、文字方向判別の精度を向上させるため、同一ブロック内の複数の文字について、同様に4方向から文字認識を行なってみる。また、1つのブロックだけで文字方向を判別した場合、特殊な文字列について文字方向を誤って判別する恐れがあるので、複数のブロックについて同様の文字認識を行なってみる。

【0076】そして、各ブロックについて、当該ブロック内の各認識対象文字の4方向別の類似度の平均値を求め、更に各ブロックでの4方向別の類似度の平均値に対する平均値を求め、これら平均値が最も高い方向を文字(文書)の方向として判定する。

【0077】このように、1文字だけの類似度で文字方向を判定するのではなく、同一ブロック内の複数文字、更には他のブロック内の複数文字の類似度で文字方向を判定することにより、文字(文書)方向を高精度に判別することが可能となる。但し、1文字だけの自身度で文字方向の判別を行なったり、或いは同一ブロック内の複数文字の類似度で文字方向を判別しても、方向判別は行なうことができる。

【0078】このような方法で、原稿方向判別を行なうが、文書中の文字はどのような状態になっているかまちまちである。例えば、ある文字は飾り文字であったり、ある文字は誤って図形を文字と判別していたりすることがある。このため、より多くの領域で方向判別処理を行なった方がより精度の高い結果が得られることは言うまでもない。

【0079】以上原稿方向認識の一例を説明してきたが、認識方法は他の方式があれこれと言うまでもない。ここでは方向認識部とすることですべてを網羅する。

【0080】尚、方向判別処理部は、一部専用ハードを搭載したCPUで構成されている。このため、指示により処理系を変更することは容易である。

【0081】また、図9の説明にて、1ページ分の色成分解析を行なうように説明したが、原稿中のある特定のブロックだけで、例えば数ライン分の色成分解析結果を出力して、その数ライン毎に優先順位を変化させる方法をとることもできる。

【0082】尚、本発明は複数の機器（例えば、ホストコンピュータ、インタフェイス機器、リダ、プリンタなど）から構成されるシステムに適用しても、一つの機器からなる装置（例えば、複写機、ファクシミリ装置など）に適用してもよい。

【0083】また、本発明の目的は前述した実施形態の機能を実現するソフトウェアのプログラムコードを記録した記憶媒体を、システム或いは装置に供給し、そのシステム或いは装置のコンピュータ（CPU若しくはMPU）が記憶媒体に格納されたプログラムコードを讀出し実行することによっても、達成されることは言うまでもない。

【0084】この場合、記憶媒体から讀出されたプログラムコード自体が前述した実施形態の機能を実現することになり、そのプログラムコードを記憶した記憶媒体は本発明を構成することになる。

【0085】プログラムコードを供給するための記憶媒体としては、例えばフロッピーディスク、ハードディスク、光ディスク、光磁気ディスク、CD-ROM、CD-R、磁気テープ、不揮発性のメモリカード、ROMなどを用いることができる。

【0086】また、コンピュータが讀出したプログラムコードを実行することにより、前述した実施形態の機能が実現されるだけでなく、そのプログラムコードの指示に基づき、コンピュータ上で稼働しているOS（オペレーティングシステム）などが実際の処理の一部又は全部を行い、その処理によって前述した実施形態の機能が実現される場合も含まれることは言うまでもない。

【0087】更に、記憶媒体から讀出されたプログラムコードが、コンピュータに挿入された機能拡張ボードやコンピュータに接続された機能拡張ユニットに備わるメモリに書込まれた後、そのプログラムコードの指示に基づき、その機能拡張ボードや機能拡張ユニットに備わるCPUなどが実際の処理の一部又は全部を行い、その処理によって前述した実施形態の機能が実現される場合も含まれることは言うまでもない。

【0088】

【発明の効果】以上説明したように、本発明によれば、カラー画像の方向を判別し、その判別結果に応じてカラー画像データに応じたデータに対して編集を行うので、例えばNin1の編集において、N枚の画像をレイアウトする際に、操作者は原稿の向きを考慮して配置する必要がなく、見易いNin1画像を形成できる。

【0089】また、方向の判別を、色成分解析、文字認識の結果により行うので、文字を含むドキュメントの編集処理において、良好な方向判別が可能となる。

【0090】更に、各色成分毎に出現頻度の高い順に文字認識を行うので、一番多い色文字を優先した、方向判別が可能となる。

【0091】また更には、下地成分の影響を受けることなく、文字認識、方向判別が可能となる。

【0092】

【図面の簡単な説明】

【図1】A4サイズの通常の文書原稿をオートフィッター101にセットする際の方角102～109を示す図である。

【図2】本実施形態におけるデジタル複合複写機の外観を示す図である。

【図3】本実施形態における画像処理系の構成を示すブロック図である。

【図4】本実施形態におけるオペレーションパネル部311の構成を示す外観図である。

【図5】複数枚の原稿を縮小レイアウトした状態を示す図である。

【図6】4 in 1の両面縮小レイアウトの例を示す図である。

【図7】本実施形態における縮小レイアウトの結果を示す図である。

【図8】本実施形態における縮小レイアウト処理を示すフローチャートである。

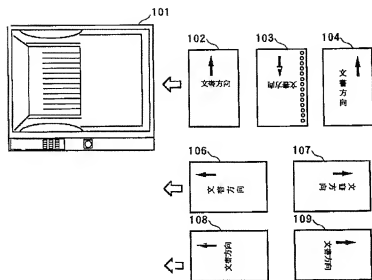
【図9】色成分解析部307の処理を説明するための図である。

【図10】原画像と文字領域判別結果を示す図である。

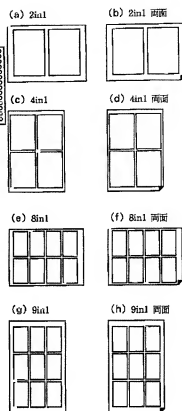
【図11】文字認識処理を説明するための図である。

【図12】文字方向判別処理を説明するための図である。

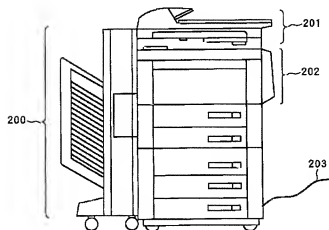
【図1】



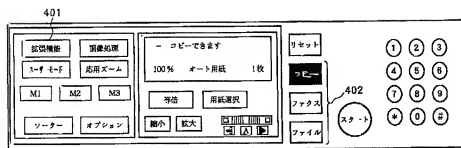
【図5】



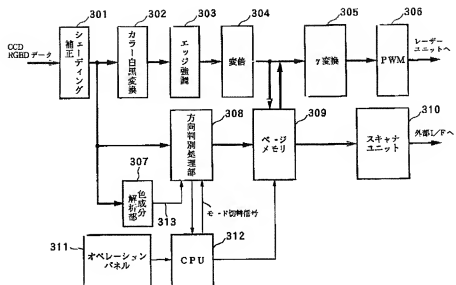
【図2】



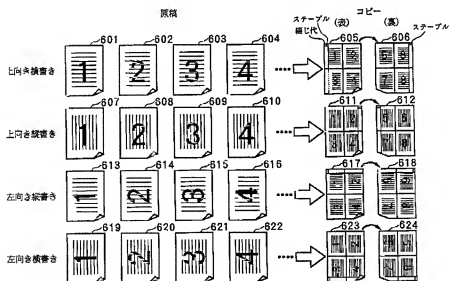
【図4】



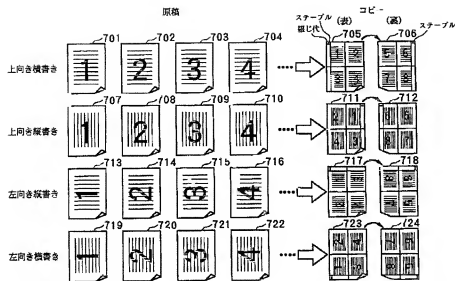
【図3】



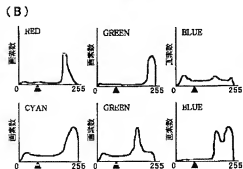
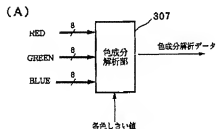
【図6】



【図7】



【図9】



(C)

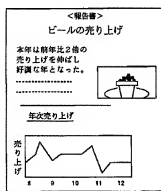
CYAN = (GREEN + BLUE) / 2
MAGENTA = (BLUE + RED) / 2
YELLOW = (RED + GREEN) / 2

(D) example >

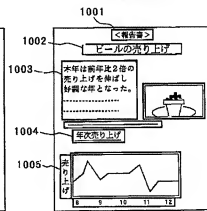
RED = 12000
GREEN = 14000
BLUE = 4000
CYAN = 9000
MAGENTA = 8000
YELLOW = 13000

【図10】

(a) 原画像



(b) 文字領域判別結果



【図11】

(a)

ビールの売り上げ

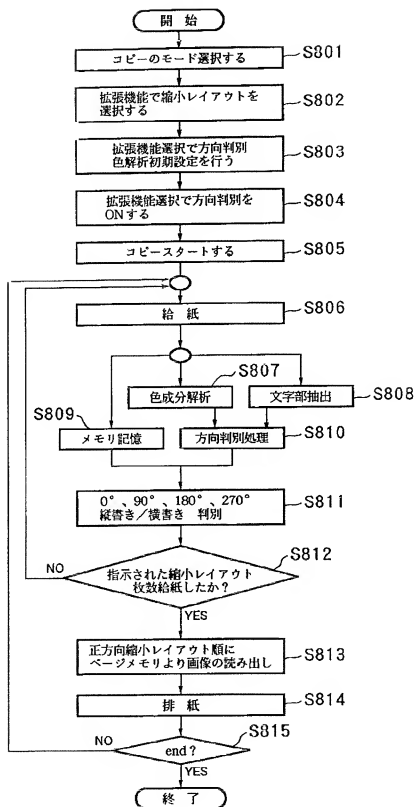
(b)



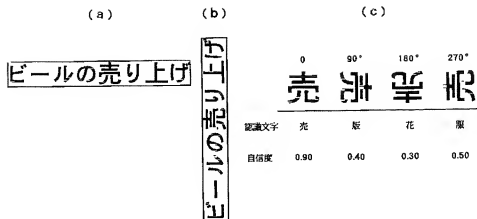
(c)



【図8】



【図12】



フロントページの続き

(51)Int. Cl.⁶

H 0 4 N 1/387
1/46

識別記号

F I

G 0 6 F 15/70
H 0 4 N 1/46

3 7 0
Z